

弘教寺



親鸞聖人御誕生850年立教開宗800年

弘教寺住職 中山英昭

本年3月よりご本山では聖人御誕生850年立教開宗800年の慶讃法要が勤まります。

聖人は承安三年（一一七三年）京都の日野の里で藤原氏の一族である日野有範の子としてお生まれになりました。平安末期のこの時代は、貴族の世から武士の世に移っていく時期で、決して恵まれた生活環境ではなかったようです。幼少期の詳細を語るものはないのですが、幼少期に両親を亡くしていることで、その厳しさは想像できると思います。

そのことも動機と言われておりますが九歳の春、叔父の日野範綱に伴い、京都の粟田口にある青蓮院を訪ねます。住職である慈鎮和尚に天台宗の僧として得度（髪をそり僧となる儀式）したいことを伝えます。準備が遅れ夜にかかることから、明日あらためて得度の儀式をしようと思えると、「明日ありと思う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものは」と詠まれ、桜の花のように明日の分らない我が命、是非とも今宵の内にと願ひ、その強い思いに負けて、得度をさせたと言われております。比叡山での厳しい修業の始まりです。

二十九歳の時に、比叡山延暦寺での二十年の修行者としての道をあきらめ、山を下り、

第54号

発行所

〒370-0131 伊勢崎市境米岡二七九-二 浄土真宗本願寺派弘教寺 寺報編集部 電話0二七〇(七四)〇五七三



寺のQR

法然聖人のもとに行かれたことは大きな決断であり、並々ならぬ思いがあったことと推察されます。六角堂で百日間の参籠をされたことは、如何に迷われ、苦悩されたかが、象徴的に語られていると思います。

法然聖人という師に出会い、お念仏のみ教えに出会われ、念仏の大道を歩むことになりました。

しかし、巷に念仏の教えが広まるにつれ、旧仏教界の反発から承元の法難による弾圧に遭い、法然聖人は土佐に、親鸞聖人は越後の国府に流罪となります。三十五歳の時と言われております。

四十二歳のおりに赦免となりますが、京都にはもどらず、開拓の地といふべき関東へと向かいます。すでにその時には恵信尼様と結婚されておられ、家族共々での道行でした。

関東での念仏のみ教えの伝道と流布の日々は聖人にとって充実の毎日であつたに違いありません。弁念の寺で有名な茨城県石岡市の大覚寺の道路脇に一部旧道が残されてお



聖人生誕の法界寺

ります。その道を聖人が通われたことを思いました時、只々有難い思いを持ったことが懐かしく思ひ出されます。

笠間市の西念寺と言う浄土真宗の別格本山が国道50号沿いにあります。

大きな木立に囲まれて、いかにも歴史の深さを感じさせる寺院です。

聖人は教行信証（顕浄土真実教行証文類）をこの地でまとめられました。



稲田山 西念寺

浄土真宗の根本聖典と言われるお聖経で、ここをもって「立教開宗800年」としております。聖人五十一歳の年で、本年一年早めて御誕生850年と合わせてお勤めすることとなります。聖人は師法然聖人が広められた『お念仏の教え』の正しさを旧仏教界に、為政者に、社会に示したい一途で『教行信証』を顕されたことと思ひます。

この度聖人御誕生850年、立教開宗800年のご法要が3月5月にかけて厳修されますが、遠く八百年の時に思いを馳せ、営々と受け継がれてきたことの尊さ、有難さを受け止めてご遺徳を偲んでまいりましょう。

この度の参拝は定数が制限されておりましたので、壮年会、婦人会、役員の皆様を中心に募らせていただきました。法要期間中自由席での予約も可能ですので、希望されます方は、弘教寺の方へお問い合わせ下さい。

親鸞聖人の関東布教と教行信証

今年には本山で親鸞聖人御誕生八五〇年立教開宗八〇〇年慶讃法要がお勤まりになります。この立教開宗八〇〇年というのは、親鸞聖人が関東で浄土真宗の根本聖典である『顕浄土真実教行証文類(教行信証)』の草稿本を完成された一二二四年を立教開宗の年と定められ、その年から来年で八〇〇年になるため、親鸞聖人御誕生八五〇年になる今年に、併せてお勤まりになるということです。今回は教行信証を書き始められた関東時代の親鸞聖人をご紹介しますと思います。

聖人は、一二〇七年に越後に流罪になり、そこで七年間過ごされました。その後、一二一四年に東国での布教活動のため、常陸国(茨城県)に向かわれました。この時通った道筋は定かではありませんが、善光寺を目指す団体とともに行動し、善光寺から上野国佐貫(群馬県板倉町)を通って常陸国へ向かったとする説が有力です。聖人は最初に常陸国下妻の小島(小島の草庵)に居を構え、三年間をここで過ごされました。その後、稲田(稲田の草庵)へ移られ、ここで本格的に布教活動を開始されました。この地での有名な話としては『親鸞伝絵』下巻第三段に記されている山伏弁円の回心の話(弁円浄度)があげられます。「一人の山伏があり、宗祖に敵愾心をいだいて、危害を加えようと板敷山で

何度も待ち伏せをしたが、うまくいかなかった。そこで宗祖の稲田の草庵を訪ねたが、宗祖に会った途端、敵愾心が消え、後悔の涙があふれた。しばらくして胸の内を話し、その場で持っていた弓矢を折り、刀や杖を投げ捨て、頭巾をはずして柿渋で染めた衣を脱ぎ、宗祖の教えに帰依した」という内容です。弁円という名は江戸時代に言われ始め、もとの『親鸞伝絵』では「明法房」、聖人の弟子の名簿にも「明法」の名前が記されていて実在の人物であることが分かります。この話の背景には関東在来の信仰とのせめぎあいがあります。実際、この話の舞台の板敷山は筑波山修験道の信仰圏内に位置し、修験者との摩擦がある中でこの布教であったことがうかがえます。

また、聖人の関東における布教活動をうかがわせてくれる遺品に安城御影と熊皮御影があります。これらは杖や草履、火桶など聖人が使用していた調度品が描き込まれている珍しい御影です。



特に安城御影には杖や草履といった道具が描かれていて、聖として各地を遍歴しながら念仏布教を測ることができます。

こうして、時に草庵で、時に各地を回って布教活動をしながら、

『教行信証』の執筆を始めるられます。

内容が多くが経典や先

学高僧の引文で構成され、自らが説くところが間違いのないものであるという論証に主眼を置きつつ、仏祖の言葉を褒めたたえるというものになっています。『教行信証』は、聖人の関東での二十年の布教活動の最中、一二二四年に草稿本が書き上げられますが、一二三四年に関東から京都に帰られた後も推敲と改訂が重ねられ、一二四七年、聖人七十五歳の時ついに完成したのです。

現在、京都国立博物館では、今回の法要に合わせて「親鸞聖人生誕八五〇年特別展―親鸞―生涯と名宝」が開催されています。そこでは、親鸞聖人直筆の『教行信証』や『六字名号』の掛け軸、安城御影など普段見られない聖人ゆかりの品々が展示されています。ぜひ足を運んで間近でご覧になってはいかがでしょうか。

参考文献…『本願寺史』第一巻

中山 大悟



掲示伝道のことば①



掲示伝道集のこの言葉を見つければ、酒好きの子供たちと苦笑してしまいました。一升のお酒があれば、まだまだと毎日安心して飲めると思いがちですが、つい忙しくしてしまいますと「あれ！お酒が無い！」ということを経験することがあります。

人生も同じでしょう。人生百年の時代ですが、忙しい日々の中、気づいてみれば、残り少ないことを知らされます。

聖人が七高僧の一人として仰ぐ善導大師の『往生礼讃』にも「人間恩々として衆務を営み人命の日夜に去ることを覚えず…」という有名な一文があります。

子育てや仕事等忙しい生活に追われている内に、時は過ぎ、いつの間にか気づけば人生の終盤になっていると言った意味でしょうか。

古稀を過ぎた私自身すごく感じております。住職になって四十年が過ぎましたが、あつという間のように思います。

まさに「光陰矢の如し」のことわざのように時は刻まれてゆくものです。

限られた人生だから、あつという間の人生だから、さりげないこの一日が大切になるのではないのでしょうか。味わいたい掲示伝道の言葉です。

住職

壮年会の講座「正信偈を読む」が始まる

弘教寺壮年会では例会を通じて会員相互の親睦を深めると共に浄土真宗のみ教えを学んでおります。今回は前回の「歎異抄」に続いて「正信偈」を学びます。教材は靈山勝海先生の『正信偈を読む』です。ご講師は引き続き西蓮寺ご住職の艸香雄道先生であります。

「正信偈」は壮年会例会で毎回お勤めされており私たちに馴染みの深いものです。それは、蓮如上人が親鸞聖人の名著『教行信証』の「行巻」にあります。「正信偈」に、聖人の「和讃」をつけられて、私たちに日常のお勤めがしやすいように、まとめられたものです。

私の「正信偈」との出会い、終戦直後の小学生の頃、母が仏前で称えていたのが始まりで、当時の私には何もわかりませんでした。それが「正信偈」とわかったのは、定年後に弘教寺さまの壮年会に入会した時です。

例会での「正信偈」を称える度に、ご住職が「フリガナを見て称えてもよいが、漢字を見て称えられるように」と言ったことを思い出します。

私は「正信偈」を日常くり返しお勤めし、耳に入っておりますが、「正信偈」の中にある真実の教えは、まだまだわかっておりません。この度の「正信偈」の購読の機会を良きご縁として、学びを深めたいと思っております。

橋本勝

「楽しく集う婦人会」

今年の2月例会では、干支に合わせて「ピョンピョンうさぎ」を作りました。

坊守さんが材料や作り方を説明くださいました。台紙のうさぎの絵に色を塗り補強の画用紙に張り付けると、紙の間一ヶ所に空気が入って可哀想に失敗。丁寧に作らなければと思いつつ、乾電池に滑り止めを巻き付け完成しました。ところが、乾電池が回転してうさが斜面を駆け下りるように動くはずなのに、すぐに止まってしまいます。坊守さんが見て前足の内側を切り揃えると、うさぎは坂を嬉しそうにピョンピョン跳び下りて来るように動き出しました。他の人のうさぎも三列に並べ競争し、童心に返って応援しました。「手芸教室」の楽しいひと時でした。

以前のお念珠作りでも出来上がった時は実に嬉しく、今でもそれを壮年会で愛用しています。また、家にこもりが

ちのコロナ禍で、寺に集まり有志で「シトラスリボン」を作ったこと等、お陰様で日々を楽しく送れました。お寺に近しく伺えることを喜び、心より感謝申し上げます。

合掌

うさぎ跳び 笑う顔味く

梅の花

泉昌子



真悟の京都日記 ー最終回ー

今回は、京都生活の集大成として、中央仏教学院での生活をふりかえっていききたいと思っています。2年前に入學した中仏の本科過程は、コロナの影響もあり、オンラインでの講義が多い1年間でありました。目的のひとつであった学院の同期と仲良くなるというものもなかなか難しく、ごく小人数、特定の仲間としか話すことはできませんでした。それでも浄土真宗の教義、歴史といった基本的な学び自体はしっかりと進め、基礎の部分は得られた1年だったように思います。



2年目の研究科過程では、本科過程の学生にお作法をお伝えする班活動がありました。人に教えるという過程の中で、自分がどこまでそのお作法を理解出来ているかが鍵となり、本科生にお伝えする前に自分で復習を重ねるなど、自主的な学びが身についたように思います。また、その中で本科生とも会話が増え、仲を深めることが出来ました。研究科の同期とも多くの人と仲良くなり、本科過程よりもさらに実践的な伝道や寺院経営についても学び、充実した2年目を過ごすことが出来ました。

合掌

郷土のこぼれ話③ 徳川氏発祥と世良田東照宮

弘教寺の東に位置する太田市世良田の新田莊遺跡は「徳川氏発祥の地」と呼ばれている。平安時代末期、八幡太郎義家の子源義国が関東に下り、その長子義重が旧新田郡と太田市南西部を「新田莊」として開き、新田氏の祖となった。



その子義季は譲り受けた世良田、上・下平塚、三ツ木、女塚、押切の六ヶ郷を開発し、押切を徳川と改称し徳川義季と名乗った。時代を経て8代後の親氏が流浪の後、松平郷に入り松平家の初代となり、7代を経て家康に至ったと徳川家系図等にある。

三河の国を平定した時、家康は「徳川」と改名した。先祖を遡って清和源氏の流れ、名門新田氏の血筋であり世良田氏の祖である徳川義季にあやかっただのである。そして、秀吉により関東の地を与えられると、先祖義季開基の長楽寺を復興し、徳川郷や長楽寺、満徳寺等へ寄進、守護不入の地として保護した。

三代将軍家光は、二代秀忠時代の日光東照宮の社殿を改築した際、義季の墳墓の側に旧奥社の拝殿と宝塔を移築し、先祖の遺徳高揚と当地の守護神としての「世良田東照宮」を創建した。以降、徳川郷・世良田東照宮は、将軍家徳川幕府から手厚く保護されてきた。

新田莊遺跡など身近な史跡に日本の歴史を形作る重大な意味があったことに思いを馳せて、訪ねてみてはどうだろう。 坊守

参考文献…「世良田東照宮」

(菊池清)

編集後記

寺の『つつじ寺だより』も54号となりました。編集や発送をお手伝いしています▼現役時代、工場に勤務した頃は秒単位の工数計算を基準とした生産高、営業では売れて『なんぼ』のサラリーマン生活をしていました▼今は丁寧をモットーに編集会議では門信徒の皆さんから出稿された原稿を誤字脱字がないか、発送では『受け取った方々の笑顔』を浮かべながら刷り上がった新聞を丁寧に1枚ずつ折り畳んでいきます▼今は与えられた時間空間があることを佛様に感謝しています。

西正裕

Table with 4 columns: 月別, 弘教寺の行事予定, 教区・群馬組の行事予定. Rows for months 4月, 5月, 6月, 7月.